
世田谷202号室

椿 梅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世田谷202号室

【Zコード】

Z8987C

【作者名】

椿 梅子

【あらすじ】

21歳、就職して半年で美容師を辞めた。自分は普通に生きていいくと思っていたアヤが、辞めたことをきっかけに数々の出来事に対面し、悩みながらも自分の生きる道を必死に探していく。まだ遊び足りないけど、学生じゃなくなつたら働かなきゃいけない。今の自分の仕事や職場に満足している?大人になりきれない気持ちと葛藤しながらも進んでいくお話。

1、無職

日本の人口1億2000万人

少子化といえど都内の学校には子供は溢れかえっている
例えばテレビに自分と同じ名字の人が出ていたら、妙な親近感を覚える。

それはただの偶然であって、その間に運命とかそのたぐいがあるわけではない。

でも遺伝子とかDNAとかミトコンドリアとかが昔の記憶を憶えていて、昔家みたいに大きな括りがあつた時代には血が繋がつていたかも知れないんだ。

だから親近感がわくのかもしれない。

でも今この街にいる人は例え名字が一緒でもみんな他人だ。

そういう街なんだと思い知られた。東京は。

私たちはプランクトンから始まって、魚が陸にあがつて、猿が進化して人間になった。どうかで人間が進化の集大成みたいに思つていただけど、進化の歴史にしてみたらそんなことはお構いなしで、生殖活動を繰り返すうちに、いつか人間より優れた生き物が現れる。今人間が「自然との共存」とか言つているのが「進化人間と人間の共存」とか言われる日がくるのだろうか。

つて渋谷に向かう電車に乗りながら、こんな進化論みたいなことを考へている人間は何人いるんだろう。

私はいつも、ブラックホールに宇宙が全部飲み込まれたら爆発して新しい地球が生まれるとか、昔今よりも優れた文明があつたかもしれないとか、物事を無駄に深く考えたがる。

ドラマを見れば、もし過去に戻れるならいつに戻る?とか、もし余命が1ヶ月だつたら何をする?とか、主人公になりたがる。

もしかしたらちょっと変わっているのかも知れない。

時々、夢と現実が「こちや」「ちや」になるときがある。

いや、本当は夢だとわかっているのに戻りたくない現実から逃げるためにわざとわからないフリをする。

今日もそりやつて用もなく渋谷に逃避行。

今日も大好きな音楽たちを聞いて、自分なりのとびっきりのオシャレをして、たいしてお金も持たずにしておこう。

私の頭の中ではいつでも自分が主人公で、通り過ぎるすべての人は登場人物になる。

頭のキーボードを軽やかに「ブラインドタッチ。

1行目は必ず今日いる街の描写。

渋谷は相変わらずひどい人ゴミだ。

この街に来る人の何人が目的を持つてて、何人が本当に用事があるんだろうか。そういう私も、誰との待ち合わせもなく来たんだけど。

東京の美容学校を卒業して、東京の美容室に就職して半年。
私は昨日そこを辞めた。

あんなクソみたいなところでも涙がでた。

何で泣いているのかわからないけど、たくさんの後悔に襲われた。

今自分が世の中でどの立場にいるか考えたらぞつとした。

俗に言うNEETだ。

大人になるとはこういうことだったのか。
仕事を辞めたら世間から除外されるのだ。

だから今日渋谷にいても、自分だけ浮いている気がした。

主人公は音を失う。

登場人物はいなくなつた。

真っ白。

そして急に襲つてくる。

ひとつと現実が。

ブブーっと車のクラクションがなつた。
音が戻ると涙がこぼれた。

私は取り残されてしまったのだ。

この流れが早い街の中、一人だけこの流れに乗れなくなつてしまつた。

だからせめてもの流行りにのる。

お気に入りの服屋に入つていつもと同じような服に目が行く。

手にとつてあわせる。

鏡の前に立つと、服は似合わなかつた。

自分の顔を見てびっくりした。

生氣を失った顔は青白く、クマが深く入っていた。

なんだか恥ずかしくなつて服屋を出た。

早く家に帰るわ。

行き先はなくとも、帰る家くらいはある。

とにかく、迷わないよう。疋んだ街に惑わされないよう。

とにかく家に帰るわ。

2、理由

家について、部屋の鍵を探す。

キークースに3口も付いている鍵は全部たいしたところには繋がっていない。

鍵を空けると部屋の中はむんとしていて、生暖かかった。

もう秋だというのにこの部屋は、とにかく暑い。

つい2日前まで冷房が活躍していたくらいだ。

あまり換気をしないこの部屋にはいろいろ悪いものが溜まつていうだ。

そんな気がしながらも部屋に入る。

靴を脱ぎ捨てて、そのまま中に進む。

もう靴箱には新しい靴が入るスペースはないから無理矢理しまおつとすると、他ののが落ちてしまう。

容量不足だ。

この靴箱も、立ち上がりが遅いパソコンも、私の頭の中も。

パンク寸前なんだ。

とつあえず、服も着替えずにベットに腰掛ける。

瞬間、ため息がでた。

薄暗い部屋で、音もなく、ただ時間だけが過ぎた。

望んでいたはずの自由な時間がただ無駄に過ぎていく。

何が正解だったのか。

容量不足の頭で考えてもわからなかつた。

目を閉じて、今日がただの休みだと思い込む。

登場人物は辞めた店のスタッフ。

思い出すのは、自分も笑っていたこと。

辛いだけではなかつたこと。

私が辞めた理由は、簡単に言えば人間関係だ。

この仕事の離職率が非常に高い理由のひとつだ。

朝から夜まで1度も飲み物すら飲めないときもある。

それでも好きだからこそできる仕事なんだろうけど、そこには人間関係が加わると好き嫌いだけの問題ではなくなる。

どこの会社でも下っぱというのは辛いものだというけど、私の場合

同期がいなかつた。

すべてのトップの仕事をひとりでやり、誰とも共有できず、自分の中にストレスをため込むしかなかつた。

最初にそれが爆発したのは8月のことだつた。

誰の顔も見れなくなつて、ただ人の話にうなずいていた。言われたことにはすべてすいませんで答えた。

気付いたときには鬱状態だつた。

抗鬱薬を飲みながら仕事をした。

すぐに「ダメになつたのだけビ。

抗鬱剤の副作用は記憶が飛ぶくらい眠くなることだつた。

朦朧としながら掃除をして、終わつたこには自分がこの掃除をすべてやつたことを覚えていなかつた。

ぞつとして、薬を飲まずに寝ると、次の日仕事にいけなかつた。

毎日近くの公園のベンチで深夜2時まで悩んで泣いた。

そして私は仕事に行かないことを選択した。

辞めるとか辞めないとか、そのときはどうでもよかつた。

ただいつも自分に戻りたかった。

仕事を休みだすと、見る間に私は回復した。

そして仕事にも復帰した。

もう一度だけやってみようと思えたから。

まだ美容師でいたかったから。

復帰してから結局何もかわっていない店の現状や下っぱの負担の多さに、もう悲しさはなかつた。私は諦めた。

そして期待とか夢とかそういう感情はなくなつた。

すべてに諦めて、全員を信用しなかつた。

そうなつたらもう終わりだった。

言葉は響かなくなる。

全身から力が抜ける。

心がなる。

その代わり涙もでなかつた。

ただそれでもやれることは精一杯やっていたつもりだから、最後の日、あの言葉だけは忘れられなかつたんだ。

最低のアシスタントだった

そして私は辞めた。

なんでいつもみたいにすいませんって言つて流れなかつたのか、今はもうわからぬいけど、もう引き返せない。

口を開けるともう口はすっかり暮れていて、現実がそこにあった。

今考えなきゃいけないのは先のことなのに、昔のいじばっかり繰り返し思い出して、どうしても消化できない。

焦りが後ろから押してくるのに、足が重く進めない。

びひょへ。明日から。私は灯りを失つてしまつたんだ。

3、下の住人

ピンポーン

チャイムが鳴った。

誰だかはわかつていた。

ケータイを見るとメールが1件来ていた。

いつものゴリ捨ての誘いだ。

ドアを開けようとする音が聞こえた。鍵がかかっているからドアは前に進まず、鈍いドンという音がした。
そしてもう一度チャイムが鳴った。

急いでドアに向かう。

ドアの窓も覗かず開ける。

下の階に住む友人だ。

彼女はいろいろ事情があつてたまたま空いた下の階に越してきた。

このアパートは2階立てでボロアパートだからとにかく壁が薄い。

だから私が帰ってきたという情報も筒抜けだ。

隣の部屋の人気がいつ帰ってきたかもすぐわかるし、友達を招けば何

を話しているかも聞こえる。

プライバシーも何もあつたもんじゃないが、世田谷のこんないところに6万代で住めるところなんてそういうのないから、それくらいは大目に見なればいけない。

「『めん、メール気付かなかつた。今ゴミをまとめてくるから待つて』

そういうて私は急いで部屋中のゴミをまとめる。

小さい6畳の部屋に2つもあるごみ箱には1週間分のゴミがパンパンに詰まっていた。

それらをどんどんゴミ袋につめしていく。

分別はあまりしなかつた。

本当はいけないのだけど、これくらいなら大丈夫だと思った。

全部詰め終わつて、最後に他に捨てるものがいか部屋を見渡した。

机の上に昨日まで使つていた名札があつた。

半年しか使つていないので、表面は傷ついていて、プラスチックにひびが入つていた。

それを手にとつて、1週間分のゴミでこっぱこのゴミ袋に入れようとした。

なんとなくためらつた。

恋人との思い出の品でもないのに、なんだか気が引けた。

つらかつた半年間。

ずっと私の左胸にいたこの名札が、なんとなく勲章みたいな気がして捨てられなかつた。

もう一度机の上に戻して、『マリ袋の口をしっかりと縛つた。

「おまたせ」

2人で100メートルほど先の『マリ置場』に『マリ』を置きに行く。

本当なら明日の朝出すのがルールだけど、東京で、まして世田谷でそんなことは誰も気にしない。

下の住人が話しだした。

「明日どつか遊びに行こうよ」

下の住人は同じ専門学校の友達で、学校を卒業して以来、半年間働いていない。

私たちは今、上下そろって完全なる『EET』なのだ。

「新宿、久しぶりに行きたいな」

と、私は答えた。

「今日どこに行つてたの？」

「渋谷。でもなんも買わなかつた。」

「そつかあ。じゃ明日は新宿で秋服買お。」

「うん。やっぱ一人じゃ決められないしね。」

これが私たちのいつも会話。

そひらへんの高校生と何一つ変わらない。

ただ年をとつて、自由と責任を得て、あのころより少し丸くなつただけ。

そして働く私たちは、高校生よりも義務とか責任とかそれらの類を、果たしてないのかもしれない。

そしてまた考えだす。深く、暗く。

頭の中で主人公が泣いていた。

キーボードの動きがとまつて、続きを書けなくなつてしまつた。

だって明日からが未定だから、未来を想像することも、夢や希望を書くこともできなくなつてしまつたから。

道が消えた。

先が暗くてまつたく見えない。

不安。

恐怖。

焦り。

一気にきた。

私だけだろうか？

下の住人の気持ちを聞きたかった。

けど、なんて言えばいい？

彼女も焦っているのは知っている。

その度合いはわからないけれど。

何を考えているのだろうか？半年も。

なんの嫌味も含んでいないのだが、どこかで私は半年働いたといつ
プライドが彼女を見下していく、それを聞くのをためらった。

嫌味に聞こえる気がして。

結局一生といつもレールの中で半年といつ時間がさほど影響しないことくらいわかっている。

「」を置いて自分たちのアパートに戻る「」は、私のこの問題の

答えが考へてもでないといつ結論にいたつていた。

せめて今夜くらいは何も考へず、明日からのことまは明日から考えようと自分に言い聞かせた。

部屋につくと、なんだかどつと疲れてしまって、服も着替えずそのまま寝た。

4、電車で

次の日、目が覚めるともうお昼すぎだった。

夢を見た。

シャンプー台で椅子を倒そうとしたらつまく倒れなくて、お婆さんに怒られる夢だった。

なんだか田覚えが悪かった。

起きたらまずメール。

先に起きた方が起きてない方を起こす。

まだ下の住人からメールは来ていないから、私のほうが先に起きたみたいだ。

とりあえずメールを入れておく。

これが待ち合わせ時間がいらない私たち上下のルール。

テレビをつけて、重たい体を起こして顔を洗う。

久しぶりに見る電ドラマはやつぱり過激で、ビックリ古い感じがした。

消えないひどいクマをなんとか隠すためにファンデーションを塗りたくる。

ふと手を見ると爪の両端が黒く染まっていた。

カラー剤だ。

カラーをしたお姉さんをシャンプーすると、どんどん爪が染まつていぐ。

働いてくるときはなんとなく美容師の証拠みたいな気がしていい、わざと嫌に思つていなかつたが、今はすゞく醜く見えた。

お風に入りの白いドレッサーをあわひて、マニキュアを探す。

もう半年も爪を伸ばしたり、マニキュアで爪をきれいに見せよくなつて思つたことなかつた。

淡いピンクのポリッシュを選んで10本の指に塗つた。

半年ぶりだったから、手が震えて少しはみ出しだが、別にそれでよかつた。

身仕度がすべて終わつて、マニキュアが乾くのを待つてじつといふとメールが来た。

下の住人だ。

やつと起きたのかと思つてメールを開くと

「『じめん。体調悪くて今日でかけらんないやー』

なんだあ。と先にがつかりしてまづのほ私の悪いことじりだ。

とりあえず大事にと送つて、今日をどうするか考えなければ。

もう時刻は午後3時を過ぎていた。

出かけなければ。

なんとなくやう思つた。

マフラーを選んでカバンを肩にさげて、靴を履く。

ドアの鍵を閉めようとしたらついで時計を忘れたことに気が付いた。

いつも机の上に置いてしまった。

でも靴を脱ぐのが面倒だから、立て膝でなんとか腕時計の搜索に向かう。

だいたい置いてある場所なんていつも一緒だ。

忘れなこようにと日々じく立つところに置いてある。

すぐに発見し、また立て膝で戻る。

そしてやはり鍵をしめて、やっと出発だ。

何の目的もないが、動かすにはいられなかつた。

ただ何かを求めて。

何かに期待して。

電車に飛び乗る。

今までだつたら、氣にも止めない風景がそこにあった。

私が座つた席の隣には、本を広げたまま寝ている大学生らしき青年が座つていた。

疲れているんだろうと、ちょっと彼の方に目をやつた。

彼が見ていたのは参考書のようなB5版の分厚い本で、なんとかして本のタイトルを見ようとしたが見えなかつた。

しかしその開いてあるページには、なにか医療で使いそうな機械についてびっしり書いてあつた。

彼は医大生なのだろうか。

私が本を横目になんとか情報を得つつと盗み見をしてると、電車が止まる振動で彼は目を覚ました。

びっくりして目をさました。

彼はキヨロキヨロして、今何駅なのかを確認しようとしていた。

そしてまた寝始めた。

まだなんだ。

次は新宿だった。

隣で寝ている彼が乗り過ごさないことを願つて、私は新宿に電車が到着すると、たくさんの降りる人に揉まれながらなんとか降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8987c/>

世田谷202号室

2010年10月9日21時35分発行